インドネシア華文微型小説と華文文学の方向性
―袁霓作品の啓示―

荒　井　茂　夫

はじめに

中国における海外の華文文学研究が始まってから25年近い時間が経過しているが、この現象はすでに文学史に刻まれ、華文文学という分野が形成されていることを示す。80年代以来開放政策のもとで、華僑・華人研究と平行して、海外の中国語による文学が紹介され、研究が始まり、評論が盛んに行われるようになった。こうした歴史的経緯についてはすでに論究したが、[1] この四半世紀の間に研究理論の行き詰まり現象があらわれ、それを批判する理論的試みが議論されるようになった。[2] 本論文はこうした批判理論をインドネシア華文微型小説の分析に適用し、インドネシア華文文学を通して華文文学の方向性を検討するものである。

1. 研究理論上の課題―「語種的華文文学」と「文化的華文文学」

中国における華文文学研究が盛んになったのは、80年代以降改革開放政策が進行する過程で華僑・華人研究が復活し、それと同時に注目されるようになったからである。それまで、限られた中国文学研究しかできなかった中国の研究者にとっては、研究の空間が広がり、よく見ると、同文同種の華文文学が眼前に広がっていたのである。それが驚きと興味を巻き起こさないことはなかった。なぜなら一般的には華僑・華人の存在は、文化大革命の動乱の時代の中国では負のイメージで捉えられ、正当に評価しようとする政策はなかったし、研究者がたとえ海外華文文学の存在を知り、研究したいと考えても、研究予算は付くはずはなかったし、評価もされないわけだから、研究意義を見出すことも出来ないのである。ところが、改革開放政策が進行する過程で華僑・華人に対する評価も変わり、華文文学の研究意義も認められるようになると、50年代から70年代の政治優先の時代には知ることも出来なかった同文同種の文学に接触した中国の文学者たちが、まず、華人が異境において営々と華語のよる文学を続けてきたことに驚き、華人の異境における発展と奮闘精神を賞賛し、華人の苦難に同情することは極めて自然なことであった。且つ、華人文学を先験的に中国における中国文学の支流と見なす傾向が圧倒的になり、そこで「元根性」、「文化郷愁」、「ルーツ」などのキーワードのよる解釈や批評が漫然と盛行し始め、当然の前提のようになったのである。こうした状況が、これまでの中国における海外華文文学研究を量的な蓄積ばかりで、普遍的な学術理念の創造を妨げ、閉塞状況に陥れていると批判されるようになったのである。[3] 汕頭大学の呉奕錡など4人の学者が、連名で書いた論文「我们对华文文学的一点思考」（汕头大学＜华文文学＞2002. 1）で、これを「語種的華文文学」と名付け、このような観念に縛られているから華文文学研究の閉塞状況の突破口を見出せないでいるのだと批判した。「語種的華文文学」というのは、華文文学が道具として使用する漢語という特徴を視点の中心におくため、漢語の背景にある文化的民族的つながりとの連想を先験的要件として疑問を抱かない習慣が、長い間に形成されてしまった。その

ために世界各地に分散し、文化的にも千差万別な華文文学の内在的本質について追究しない。つまり、言語的な帰属意識を研究者が思索の出発の前提としているために、華文文学の漢語による言語的表象が漢語の本家である中国文学に帰属するという感覚が先験的にあると言うのである。その結果、理論的追求の方向が華文文学自身に志向することもなく、華文文学の本質的属性を追求しないという、或いは出来ないという習慣的研究傾向が蔓延してきたのである。

彼らはこのように華文文学研究の現状を批判し、この「語種的華文文学」の桎梏を超越するために「文化的華文文学」という新しい観念を提起した。これは、まず華文文学研究において、言語的民族的属性の強調やそれに基づく理論の構築を放棄し、華文文学の存在を統一された一貫した精神のある、独立自足の文化的現象として捉え、その出現、存在、発展或いは消滅するかも知れないという点も含めて、全ての根拠は華文文学自身にあるものと認め、華文文学を普遍的な文化連係の中で捉えなければならないというのである。

例えば、華文文学発展と中国の文学活動はある種の恒久的因果関係があって、中国の発展は海外の華文文学を盛んにするとい考え方は、それは単なる推論に過ぎず、そうした関係は華文文学の外部状況であって、そうした思考そのものが華文文学の内在的本質を外在的要素に転化してしまう一種の「文化民族主義」だというのである。言い換えれば、もしこの因果関係を認めれば、実際には華文文学は中国文化の付属になってしまうと考えるのである。またもしそうなれば、華文文学に一貫した主体性はなく「際限のない量の集合となり、量の集合には魂はなく、外在的条件の起伏に従って消長し、存在の最大の理由と根拠は中国文化に帰することになるか、或いは中国と西洋文化の間で切り裂かれ、ついには創作自体や創作の尊厳も他属となって、創作者個人の輝きさえ文化衝突の表象となってしまう」のである。結局、「華文文学」とは、本来近代以来出現した自我の表現形式なのであって、こうした視点こそ普遍的文化表象としての華文文学の存在根拠を示すことが出来るのである。

2. 問題の整理

以上に紹介した中国における近年の華文文学研究理論上の問題を、華文作家の側から見るとどのように整理できるだろうか。

確かに中国の研究者が華文文学を「海外」という言葉で一括りにすることに不満を表明する華文作家も少なくない。華人作家は華文文学を作家の帰属するそれぞれの国の文学と見なすのが普通であり、通常は中華文化という歴史性に自らの文化的アイデンティティを認め、同時に社会的政治的或いは文化的にも自らが帰属する国にアイデンティティを持つのである。社会学者の言ういわゆる「複合アイデンティティ」である。さらに重要なことは、そうしたアイデンティティは異境で奮闘した華人の先祖の辛苦努力の時間的蓄積の上に形成されているものであるから、当然作品には中国の故郷に対する素朴な愛情や郷愁から中華文化に対する憧憬まで、多様な表現によって描かれている。しかし華文作家は同時に居住国の国民として帰属感を持ち、その国の言語教育も受け、原住民族文化に対しても愛着を持っているのである。従って一人の作家が二つの郷愁や文化的帰属感を表現することも出来るし、華文文学世界全体で見るならば多様な表現形態があるのである。それが呉奕等の言う「本来近代以来出現した自身の体格・姿を持った海外華人の生存形態と人生形式、生活の体現であり、独自の個性的に成熟した自我の表現形式」であるところの華文文学なのである。しかし、一方では呉奕錡等が批判する中国の

研究者の先験的「文化民族主義」的意識と共感関係にある華人の素朴な文化民族主義、即ち中華文化に対する愛着、憧憬、自負などは多くの華人作家が持っているもので、それがまた華文文学世界の多様な表現形態の中に溢れているのである。

「文化的華文文学」観念の大きな特徴は、それが華文文学の自立的な発展をさらに促進することに繋がることである。即ち、「文化学」とい用語の使い方が曖昧なのだが、社会批判や変革を求めようとする実践的側面を持つ近年のカルチュラルスタディーズとして見れば、華文文学のローカル文化としての独自の個性、価値や意義に着目することであり、「独自の体格」を持った「自我の表現形式」という「文化的華文文学」の観念の意義を説明する十分な根拠となる。しかしそうならば、筆者も含めてそうした視点を持った研究者は中国の外ではすでに多数存在しているのである。

しかしこうした観念を理論化することによって、25年来の古い視点を閉塞状況の原因として批判し、それを脱して研究の活路を求めるために、中国の研究者の視点を矯正しようという強い意図が示されているという点で、意義のある問題提起なのである。

3.「唐山意識」と「語種的華文文学」

中国の改革開放以降25年に渡る華文文学研究の理論的到達点の一つが、この「文化的華文文学」と「語種的華文文学」だと言えるが、それではこの理論に従って、逆に現実の作品を考察することによって、作品や作家の傾向を分析すれば、何かを読み取ることが出来るだろうし、或いは示唆的な何かを発見をすることが出来るのではないだろうか。それには当然大量の作品の閲読が必要となるが、ここではインドネシア華文作家協会会長の袁霓の作品を中心に考察を試みる。

手元にあるインドネシア華文文学の資料は限られているが、「砂漠的緑洲」（1995年）と「印尼短編小説選」（林万里編、1997年）には合計91編の作品が収められている。総じていえることは、濃淡の度合いは別にしてみなインドネシア本土意識がベースとなっていることである。（黄東平の作品は別に論じる必要があるので、ここでは除く）例えば明芳の「淡淡的郷愁」（「淡い郷愁」、「砂漠的緑洲」所収）は、「金を儲けたら必ず一度唐山に帰るんだ」（唐山とは中国の意で、中国の故郷を指す）と言いながら、異境で世を去った作者の父親の故郷広東梅県松口に対する強い郷愁に対して、作者が徐々に共感を抱くようになり、いつか必ず行こう、と決心するのである。それを「淡い郷愁」というのであるが、明芳もその友人達と同様に唐山に行けば、またその郷愁を確かなものとするはずである。けれども同時に明芳は「我々は父母が褐色の大地に産み落とし、そこに根を生やし、その自然の恵みで生育した熱帯の樹木である」として、インドネシアの大地に対する帰属感を語っているのである。その心情は生まれ育った土地に対する極めて自然なものだ。「校園里的芒菓樹」（「校庭のマンゴの樹」）の中では少女の懐旧の念を通じてロマンチックにインドネシアの郷土に対する愛着を表現している。ここから当然唐山に対する郷愁と生まれた土地に対する愛着という本土意識の二つの軸を読み取ることが出来るのである。

今便宜的に前者を唐山意識、後者を本土意識（インドネシア郷土）として、袁霓の作品を見ると、やはり同様にこの二つの軸を読み取ることが出来るのである。袁霓の作品は全部で18編（内1編は同内容で実質的には17編）手に入れることが出来たが、（華文文学作品の入手は

一般的に現地で購入しない限り手に入らない。インドネシアの華文作品は特に困難であり、袁霓の作品は本人に直接頂いたものである。袁霓はインドネシア華文作家協会の会長。）分類すると下表のようになる。

（　）内は発表年度

唐山意識	本土意識	その他
片片竹葉情　('00) 流伝海外的客家習俗　('03) 松江的碧波、祖母的点滴('03)	1　愛他死後的夢墜　(97) 2　我看広告与包装設計 3　山中一日 4　伴娘　(97) 5　三個皮箱　(99) 6　彩虹島上吃海胆　('00) 7　達尓梭的遭遇　('00) （ダルソノの境遇） 8　重建家園　('02) 9　面包　('03) 10　上報　('03) 11　家之国　('03) 12　呈堂証物　('03)	従愛情到天空　('00) 高空驚魂　('03)

「片片竹葉情」は、家伝の粽を題材として唐山意識を表現する散文である。粽は餅米で作るもので、普通粳米を使うことはないが、作者の祖母が唐山から伝えたのは粳米を使った粽であった。近所の人にも好まれ、子供の頃から慣れ親しんだ味覚には、深い愛情が包まれていた。唐山の家郷では粳米を使うと言った祖母の言葉を、いつの日か確かめに行きたいと願う作者にとっては血脈の郷愁であると言えよう。また端午の節句にまつわる屈原の故事に言及した後、「人々は粽の来歴を思い出すことはないかも知れないが、龍の伝統は消滅することはないし、屈原の冤罪もすでに雪がれている」と結んでいる。また同時にジャカルタの華人の粽は時代の変遷と風俗の同化とともに変化し、もともと伝えられてきた味とは大いに違ってきており、作者の言う「ニョニャ粽」（ニョニャは同化したプラナカン華人の女性を指す）は竹の葉を使わないで、インドネシアに自生する一種の香草を使い、中身の餡にも工夫を凝らして取り分けて美味であると言うが、言うまでもなく前者は唐山意識の表象であり、後者は本土意識の表象と言えよう。

「流伝海外的客家習俗」も散文で、客家人としての伝統的習俗の保持について誇りを持って語っている。「松江的碧波、祖母的点滴」も祖父母に対する肉親の情愛から出発し、父祖の家郷に対する郷愁に共感し、実際に家郷を訪ね客家の特色ある食品文化や山歌の酬唱などの文化を体験するという、唐山との血脈の郷愁を表現している。

こうした唐山意識が、やはり中国の研究者の、華文文学が道具として使用する漢語という特徴を視点の中心におく「語種的華文文学」に属する観点からは、言語的な帰属意識を研究者が思索の出発の前提となっているために、先験的に中国文化に属する支流のように読み解かれてしまった。それが呉奕たちの批判なのである。確かに80年代初期の当初においては、眼前に広がる華文文学世界の広がりを知った中国の研究者にとっては、「文化郷愁」、「尋根」などのキーワードによって華文文学を理解し、説明することが最も容易な方法であったと考えられる。

4. 本土意識と「文化的華文文学」

一方、本土意識として分類した12の微型小説及び短編小説に表現されている本土意識は、

共通点はあるが、その性質や濃度において違いがある。

表中本土意識蘭2の「我看広告与包装設計」は、一見単純な広告のデザイン設計にまつわる話である。本土意識の明確な表象は薄いのだが、作者が生活しているジャカルタの都市景観と華人の風水に関する伝統的観念がモチーフとなっているもので、いわば無意識の本土意識と形容すべきようなジャカルタ市民としての華人の日常性が描き出されている。単なる華人ジャカルタ市民では作品の効果はないが、風水という華人文化を日常性の中に溶かし込んだが故に作品を面白く仕立て、日常性という無意識の中に本土意識を感じさせる効果を上げているのである。

4の「伴娘」もいわば華人市民生活の日常によくあるような出来事であろう。主人公は早くに父母を亡くし、苦労して弟妹を育て上げたが、そのために婚期を逸した中年華人で、華人伝統の「相親」（見合い）の様子がユーモラスに描写されている。伴娘とは介添えの女性である、主人公が最後まで伴娘の方を見合いの相手であると思い込むおかしさから、本人の深酷な苦悩が描かれるが、日常性とともに華人性というか、華人であるが故の苦労を推察させる作品でもある。

実はこうした日常性の中にとけ込んだ本土意識の描写はインドネシア華文作家に共通してみられる傾向である。例えば林万里は生まれも育ちもバンドンで、北京師範大学の中国文学科を卒業しているが、ほとんどの作品がこの傾向に属する。「金龍魚」という微型小説などは、読んでいて思わず吹き出してしまうほどユーモアの中に華人生活の日常から本土性を感得させる作品である。龍魚（アロワナ）は華人が好んで飼育する淡水魚である。台湾でも飼育が非常に流行し、改良が重ねられ多くの品種が作り出されている。「金竜魚」（ゴールデン・アロワナ）もその一種であるが、これもまたさらに数種類に分かれている。高価で幸運を呼ぶものと考えられている。主人公は叔父に呼ばれて、新しく手に入れた高価な金龍魚を見に行き、反日長々と説明を聞き、夕食に招待されることになる。叔父は料理上手で評判のアマに夕食は魚料理を出すよう命じるが、アマは金龍魚を料理するよう命ぜられたと誤解し、叔父の自慢の金竜魚を一品の料理に変えてしまうのである。もちろんアマはインドネシア原住民族で、金竜魚の価値や意味など知りもしないのであるが、どんでん返しで終わる微型小説のよくある形式ではなく、読み進む間にアマが料理するであろうと言う推測と叔父の心理との格差を面白く想像させる構成になっている。

表中本土意識欄の3の「山中一日」と6の「彩虹島上吃海胆」はインドネシアの自然と原住民族の生活に密着し、インドネシアの自然と人々と一体化した華人の姿を読み取ることが出来る、やはり無意識の本土意識に属する作品である。宋元の「漁村の一夜」なども、少年時代に作者が原住民族漁民の家で一夜を過ごした、冒険的体験の話であるが、これらの作品から感得される本土性は、もはや華人にとっての故郷はインドネシアだということなのである。

このような作品が、言語的な帰属意識を思索の前提とする研究者によって中国文学の支流であると見なされるとすれば、それはやはり呉奕たちが言うように、「そうした思考そのものが華文文学の内在的本質を外在的要素に転化してしまう一種の文化民族主義だ」という批判は間違っているとは言えない。それは袁霓のその他の作品を読み解けばより明らかになる。

「三個皮箱」「達尓梭的遭遇」（「ダルソノの境遇」）「重建家園」「家之国」などの作品は、みな1998年5月の暴動の影響を題材とした小説である。「三個皮箱」は、暴動によって家財を全て失った家族の娘が、スーパーのビニール袋を鞄代わりにし、草履履きの姿で留学の為に出発

する飛行場で、父母と悲壮な別れををする場面で始まり、外国で苦労をして学ぶ傍らアルバイトをし、1年後には兄弟の分まで鞄を買って帰国するというストーリーに託して、悲惨な境遇に負けることなく、希望を失わなければ必ず黎明を迎えると言って読者を勇気づける。「重建家園」も暴動で家財の全てを失った母親が主人公だ。家を焼かれ奪い尽くされた打撃に精神が崩壊しそうな母親が、善意の助けを得て、立ち直り、人情のある限り希望を失わず、人々は互いに助け合わなければならない事を深く体認し、マルクやアンボンでも暴動が起こっていて自分と同じような悲惨な境遇に陥った人々が数多くいることを想起し、政治の安定が国民の幸福と発展の根本であることを訴える。もちろん作者は暴動の惨劇とこれら主人公に託して、国民として国家社会の安泰を願っているのだが、これまで歴史的に何度も発生している排華暴動の一方的な被害者である華人は、互いに助け合うことによって自ら立ち直る以外にない、またその希望を失うな、と訴えているのである。これらの作品は華人の目を通した内容であるが、「ダルソノの境遇」はインドネシア原住民族の貧しい建築労働者の目を通して、この華人を標的とした暴動が、実は国民的悲劇であることを訴え、同時に圧倒的に貧しい原住民族の下層の人々の生活を描くことによって華人も原住民族も国民としての運命を共有していることを表象している。

仕事にあぶれ毎日妻に罵られているダルソノは、ある日やっと見つけた暴動跡の再建現場で異様なに臭気に気づき、壁をよじ登って隣の焼け跡を覗くと、恐ろしく焼けただれ腐敗した幾つかの死体が眼に飛び込んできたのである。驚いて壁から落ちたダルソノはそれ以来働く意欲が萎えてしまったのである。家でぶらぶらしていた彼はネズミを目の敵にしていたが、命あるものの尊さに、ふと気づき、口汚く罵る妻の手からネズミ獲りを取り上げ、再生の計画を耳打ちすると妻の目は輝き、ダルソノも将来の光明に働く意欲を取り戻す、と言うエンディングだ。当然ダルソノは自分が見た死体は華人のもので、加害者はインドネシア原住民族であることも知っているのである。

ところで、こうした作品はまさしく呉奕綺等の言う、「自身の姿を持った海外華人の生存形態と人生形式、生活の体現であり、独自の個性的に成熟した自我の表現形式」以外の何者でもないのである。袁霓のこれらの作品が第一に示唆していることは、インドネシア華人の華文文学はインドネシア固有の文学以外の何者でもないという根本的な属性の問題であろう。

「上報」とい作品も貧しいインドネシア原住民族農民の半生の話である。貧しい農婦ファティマは、子供の頃に親に死に別れ、何度か結婚に失敗し、老いてたった一人だけ育てることが出来た娘さえ、出稼ぎに行った中東の某国でメイドとして働いていたが虐待され、同じような境遇のインドネシア人少女たちとともに送還されて帰国したものの、ファティマの娘だけがジャカルタの病院で死んでしまう、それを知らないファティマは娘の帰りを待って、稲穂の実った農村の藁葺きの小屋の前で、ひたすらよい知らせを待っている、と言う場面で終わる。その他の作品のように希望の光明は描かれない、徹底した悲劇であるが、何故そうなのであろうか。

作品は読者の自由な思考と想像に委ねられると、意味的空間も自由に広がるものである。「上報」は2003年12月に書かれた微型小説である。同年1月には「呈堂証物」と言う読者の想像をかきたてる極めて比喩的な作品を書いている。この作品は、裁判がモチーフである。被告は妖術で人間の絆を断ち切り、人々の社会的関係を分断し、社会の発展を妨げた罪で訴えられた。原告はさらに、被告は人心を惑わし、人々を歓喜させたり怒らせたり、外国と内通して祖国を裏切る大間諜で、麻薬ブローカーの手先で、「古今中外天下の大罪人」だと告発する。

その物証として、被告の名前だけが書いてあるビラを示し、何よりの証拠だと言い、証人はいるのかと問われると、「私です、私こそ古今中外天下第一の正義の士で、何もおそれない、許せないことには敢然と立ち向かう。誰にも嫌われる奴は再起できないほど打ち倒さなければならない！」と叫んで終わるのだが、しかし一体原告は誰なのか、証拠のビラの比喩は何か、「古今中外天下の大罪人」は誰なのか、自由な想像に任されている。

もしこの作品を境に、希望の光明でストーリーを結ぶことを止めたとしたならば、この作品の中で、妖術を使う「古今中外天下の大罪人」や、妖術をかけられた人々が互いにたたき合って飄然としている有様などが暗喩するものは、暴動の情景と引いては政治の腐敗に他ならないであろう。

終わりに

袁霓の本土意識に分類される微型小説は、つまるところ、生命や人間の尊厳という普遍的な価値を、インドネシア的状況を通して発信することによって、政治的な民族抑圧を批判し、国民として平等の存在であることを訴えているのである。このように読み解くことが出来るが、結局袁霓の作品は、「独自の個性的に成熟した自我の表現形式」であり、引いてはインドネシアの華文文学は、「独立自足の文化現象」として、普遍的なインドネシアの文化連係の中で捉えなければならないということなのである。また、インドネシアの個別の文化事象を切り口に社会批判を行い、変革を求めようとする実践的な表現の始まりを予感させる文化現象の一つである。その意味では、華人の伝統の復活と同様に捉えることが出来る。即ち、開放政策後許容されるようになった獅子舞やドラゴンダンスの復活など華人の伝統文化と同列の文化現象なのである。また同時にインドネシア華文文学の、本土意識の方向性を示しているのである。

注

(1) 関連する主要な拙論は以下の通り、
「華文文学研究の理論的課題と争点—中華的共感世界の歴史的二元性—」『中国 21』、愛知大学現代中国学会編、Vol17, 113－138 頁、2003 年
「華文文学研究のパラダイム」三重大学人文学部文化学科研究紀要第 21 号、2004 年 3 月
「馬来亜華文文学馬華的心理路程」中国社会科学院文学研究所編『走行二十一世紀的世界華文文学』中国社会科学院、352－377 頁、1999 年
「中国・台湾研究華文文学与馬華文学的走行』マラヤ大学中文系・マレーシア華文作家協会編『扎根本土面対世界・第一回馬華文学国際学術検討会論文集』115－124 頁、1998 年
「華文文学の方向性—求心力と独自性—」三重大学人文学部文化学科研究紀要第 11 号、1994 年 3 月
「マラヤ華文文学の歴史的景観」海外事情三十六巻十号、1988 年

(2) 呉奕錡、彭志恒、趙順宏、劉俊峰、「我們対華文文学研究的一点思考」『華文文学』2002 年 1 月、汕頭大学

(3) 同上